

肺 *M.avium complex* 症に対する増悪因子の検討

松本 武格¹⁾ 平野 涼介²⁾ 藤田 昌樹³⁾
渡辺憲太郎^{1),3)}

¹⁾ 福岡大学病院呼吸器内科

²⁾ 福西会病院

³⁾ 福岡大学医学部呼吸器内科学

要旨：肺非結核性抗酸菌症感染症，特に *Mycobacterium avium complex*（以下 MAC 症）の臨床経過上の増悪因子を同定するために，当院における症例対象研究を行った．対象症例は 2000 年 1 月 1 日から 2010 年 12 月 31 日までの期間に肺 MAC 症と診断され，3 年以上経過を追跡できた 47 症例（男性 8 例，女性 39 例）をレトロスペクティブに解析した．診断確定時と 3 年後の胸部 X 線を比較検討し，増悪群 9 例と非増悪群 38 例の 2 群に分け，増悪因子を検討した．その結果，胸部 X 線での空洞病変（増悪群 4 例 vs 非増悪群 3 例），2 剤以上の抗結核薬治療歴（増悪群 8 例 vs 非増悪群 15 例），2 回以上 2 剤以上の抗結核薬治療歴（増悪群 5 例 vs 非増悪群 6 例），喀痰塗抹陽性（増悪群 7 例，非増悪群 12 例）が増悪群で有意に高頻度であった．性差，採血所見（Alb, TP, CRP, T-Bil, AST, ALT, 白血球数）は両群間に有意差は認めなかった．死亡，対象疾患の増悪による入院目的の転院などの予後不良症例は 3 例であり，有空洞症例 2 例，治療導入症例 3 例だった．本研究から，空洞病変を有した症例もしくは塗抹陽性の症例は臨床上の増悪因子と考えられた．これらの症例は注意深く観察し，治療導入時期をよく検討する必要があると考えられた．

キーワード：肺 MAC 症，増悪因子，非結核性抗酸菌症